

Oriente, Marruecos en la visión del modernismo y de la Generación del 98

「モダニズム，および 98 年の世代から見たオリエンとモロッコ」

2005 年 10 月 26 日，モロッコから来日されたアブドゥラー・ジビルー Abdellah Djbilou 教授による講演会が，「モダニズム，および 98 年の世代から見たオリエンとモロッコ (Oriente, Marruecos en la visión del modernismo y de la Generación del 98)」と題して，東京外国語大学海外事情研究所にておこなわれた。

ジビルー教授は，スペイン語文学を専門とされており，スペイン語圏（スペインだけではなくラテンアメリカを含む）の文学作品の中にあらわれるアラブ的なテーマについて多くの研究を発表されている。また，スペイン語文学のアラビア語への翻訳や逆にアラビア語文学のスペイン語への翻の仕事も数多くこなされており，ジブラルタル海峡の兩岸の相互交流にも大きく努力されている方である。現在は，モロッコ北部の都市タンジェで，アブドルマーリク・アッサアディー大学ファハド翻訳大学院副所長の要職をつとめておられる。

今回の来日の主な目的は，10 月 30 日に開催された「史資料ハブ地域文化研究拠点」主催国際シンポジウム「ジブラルタル海峡をはさむ他者認識 イベリアとマグレブの相克」への参加だったが，せっかくの来日の機会ということで，国際シンポジウムとは別にご自身の専門研究の一端を日本の研究者にも披露していただくというねらいで企画されたのが今回の講演会である。以下，このときの報告要旨を紹介したい。

講演会のテーマは，19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのモダニズム文学（ラテンアメリカで生まれた文学の刷新運動）や「98 年の世代」（米西戦争の敗北をきっかけにスペインとは何かを問うた知識人たち）において，オリエンとモロッコがどのように扱われていたのかを検討しようというものだった。

ラテンアメリカで生まれたモダニズム（モデルニズモ）は，自分たちがおかれた現実とは異なる異国に対して大きな関心をもつものだった。それゆえ，アラブ・イスラーム世界，特にはモロッコは，彼らのとりあげる重要なテーマの一つだった。そこでは，オリエンとは，しばしばアラビアン・ナイト的な幻想的で非現実的なものとして表現されていた。ここでのオリエンとは，必ずしも現地での見聞にもとづくものである必要はなく，もっぱら書物からえた知識をもとに表現されるようなものであった。

また，スペインがかつてイスラームの地であったことを反映して，モダニズムの詩人たちにはアラブ・イスラーム的なものと自分たちとを同一視するような視点も見られた。たとえば，ニカラグア出身のモダニズムの代表的詩人ルベン・ダリオは，コルドバのメスキータ（旧大モスク）を訪れた際，「靴をアラブ風のスリッパに履き替えて，『ただアッラーのみが偉大なり』という言葉をつぶやきたいと思った」と記している。また，スペイン南部アルメリーア出身の詩人ピリャ・エスペサは次のようにも述べている。「わたしたちアンダルシア人は，心底からキリスト教に改宗しているけれども，わたしたちの中にあるイ

スラムの血を完全に否定することはできない」。もっとも、彼らが想像するオリエントは多分に主観的で想像上のものであり、現実のオリエントとはまた別であった。

一方、「98年の世代」の見方は、これと微妙にニュアンスを異にする。彼らはモダニズムの文学者たちと同様にモロッコに異国趣味的な関心を抱く一方で、スペインとモロッコとの間に不可分の関係を見出す。1898年の米西戦争で最後のアメリカ植民地を失ったスペインは、新たな進出先としてアフリカへの関心を強めていくが、そうした中でこのような「98年の世代」のモロッコ観は植民地主義と無縁ではありえない。例えば、彼らの先駆者ともいべきガニベットは「わたしたちの対外政策に対して向けられた伝統的な方向性は、一般的にカトリック女王イサベルの遺言を守らねばならないということで取り決められたものである。スペインの未来はアフリカにある」と述べている。また、「98年の世代」の中心人物の一人アソリンは、スペインの自然国境をアトラス山脈におき、スペインとモロッコとの地理的一体性、ひいては文化的共通性を主張する。

しかし、ジビルー氏の意図するところは、必ずしもこれら「98年の世代」のモロッコ観が持つ植民地主義的側面を強調することではない。むしろ逆に、彼らのモロッコにかかわるテキストのうち、文学的・芸術的側面をとりあげ、政治性とは別の観点から紹介することにあつたように思われる。講演のしめくくりは、前述のアトラス自然国境説を論じたアソリンのテキストを、ジビルー氏独特の低音のきいた口調で朗読するものであった。この文章は現在のモロッコで学生用教科書にも掲載されているということだが、このことはモロッコの学校ではアソリンのテキストが、スペイン植民地主義ではなく、むしろスペインとモロッコとの親密で友好的な関係を強調する文脈で理解されているということなのだろう。

筆者には、ジビルー氏の「98年の世代」に対する評価の当否を云々するだけの用意はない。しかし、モロッコ人であるジビルー氏が（もちろん氏がすべてのモロッコ人を代表しているわけではないが）こういった見方を提示していることの意味は、それ自体、考える必要があるように思われる。その意味で今回の講演は、スペイン語圏の研究者や日本人研究者の報告ではありえない、きわめてユニークなものであったといえるだろう。

（文責 佐藤健太郎）